

---

# とある災厄の幻想殺し《イマジンプレイカー》

シラッチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある災厄の幻想殺し《イメージンブレイカー》

### 【Nコード】

N6945U

### 【作者名】

シラッチ

### 【あらすじ】

上条当麻はとにかく不幸な少年だった。今日も当たり前のように事件に巻き込まれ  
上条さんの性格が鬼  
畜だったら というIFのお話です

七月十九日

七月十九日。

その日上条当麻という少年は不幸だった。

歩道を歩いていけばトラックに突っ込まれ、建設中のビルの下を歩いていけば鉄骨が落ちてくる。そしてこれ以上の不幸を避けようとわざわざ遠回りして裏路地を通ればスキルアウト同士の抗争に巻き込まれて拳銃をぶちこまれる始末だった。

しかし、これだけの不幸も彼にとっては日常茶飯事の事だった。それだけ上条当麻という人間は不幸にまみれている人物なのだ。

「苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア……これにすつか」

腹を満たす予定だったファミレスの中で上条は珍しく短時間で注文する品が決まった。何だか今日は珍味が食べたくなる気分だったのだ。

ウエイトレスを呼んだ後の退屈な時間を過ごしていると、何やら後ろが騒がしくなってきた。

「お兄さん幻想御手<sup>レベルアップ</sup>って知らない？」

「知らない事はねえけどよ……タダってわけにはいかねーぜ？」

「まあ君の場合、俺が欲しいのは体かな？ あっはははは！」

耳にするのさえ煩わしい数人の汚らしい男の声だった。

話の内容から察するに幻想御手という物欲しさに女の子が不良グループ（声から大体察した）に接触したのだろうか？

（レベルアップって何だ？ 聞いたことねえな……っと、そんな事はどうでもいいか。とにかく関わり会わないようにしよう）

軽く頭を振って気持ちを『苦瓜と蝸牛の地獄ラザニア』に気持ちを切り替える。早く料理運んでこいよと苛立ち始めたその時、上条のポケットに入れていた携帯電話が振動し始めた。

「はあ、と溜め息を吐きながら携帯を耳に当てる。

「ヒロシ、ちゃんとお母さん口座にお金を振り込んだからね」

完全なる間違い電話だった。しかも恐らく電話相手は詐欺に引っ掛かっている可能性大である。

速攻で通話を切ったのとスキンヘッドの兄ちゃんに「おい」と声を掛けられたのはほぼ同時だった。

「は？ 何でせうか？」

「お前……今誰と電話していた？」

「誰ってただの間違い電話」

「しらばっくれてんじゃねえ！！ テメエ今、幻想御手ってワード聞いて風紀委員ジャッジメントか警備員アンチスキルに通報しただろうが！！」

「ん？ 風紀委員ってこの時間帯に活動してたっけ」

検討違いな疑問を浮かべるキョトン顔をした上条の胸倉をスキンヘッド男は掴み上げる。

「ナメてんのか糞ガキい！！」

放たれた右ストレートが上条の頬を貫き、彼の体はテーブルの上に投げ出される。まだ料理が運ばれていなかったのがまさか幸となるとは彼は思わなかっただろう。

「おい、どうした」

騒ぎを聞き付けたのか、スキンヘッドの仲間らしき人物がぞろぞろと集まってくる。

「この糞ガキが警備員に通報しやがった」

「ああ？ 通報って幻想御手をか」

「マジで？ じゃあもう殺そうぜコイツ」

「っーわけだ。とりあえず表出よっか」

突き飛ばして上条を店の外に放り出してスキンヘッドの男は不敵

に笑う。

「じゃー取り敢えずお金出そうか？ あ、カードと通帳も忘れずにな」

ゲラゲラと笑いながらスキンヘッドは七人の仲間達と共に上条に近付く。

「はは」

ゆらりと立ち上がった上条の口元が歪む。

「全くもって不幸だ。店に入っても飯食えないのかよ。おまけに殴られるし」

何を言ってるんだコイツは、とスキンヘッドは上条に歩み寄る。

「殺せるもんなら不幸ってヤツを殺してみてえよ。この幻想殺し《イマジンプレイカー》でな。だからさあ」

右腕を振り上げる。

「その不幸をぶつ殺す」

それは楽しそうな顔だった。まるで試験明けに我慢していたテレビゲームをした時のような。そんな表情を顔に貼り付けたまま、上条はスキンヘッドの顔面に拳を突き立てる。

鼻柱を砕く感覚が拳に伝わり、スキンヘッドの体がノーバウンドで三メートル後方に飛んでいく。

「タカヒロ！」

「っ、てんめえ！」

お仲間の一人がサバイバルナイフを振り上げてきたが、上条は逆にその手を右手で掴んで捻って無理矢理に骨を粉碎した。

声にもならない悲鳴を上げる男の手から滑り落ちたナイフを左手で上条がキャッチする。

「じめんな」

一応謝ってから男の鳩尾にナイフを突き刺す。

腹を押さえて倒れる男から後ろに控えている六人に目を移す。そ

の内の比較的上条の近くにいた一人がポケットから黒い物を取り出そうとしていた。

「おっせーよ」

左手からナイフを握る手を右手に移し、ナイフを投げ付ける。

「ぐああ!？」

男が取り出そうとしていた物が上条の足元に転がってくる。それはこの都市であまり普及のしてないローテクな拳銃だった。

「おい、ま」

拾い上げた拳銃の狙いを定めて何の躊躇いもなく引き金を引く。

「あああッ!!!」

両足を撃たれ、もんどり打って男は倒れこんだ。

「あと五人でせうか？」

ギョロリと目を動かすとその内の四人は「助けてくれ」やら「警備員さん!」とか言いながら逃げしてしまった。

「……と思ったけどあと一人になっちまったな」

軽く笑いながら上条は拳銃をその辺に放り投げる。

「この、クソ野郎お! マジで殺してやる!!」

残った最後の一人、茶髪ロン毛の男の手には燃え盛る火の玉があった。それを見ても上条の楽しそうな表情は変わらない。

「俺は強能力者《レベル3》だあ! 能力者を相手にしちまったのがそもそもの間違いだったなあ! 死ねえええッ!!」

相手が勝ち誇った顔で火の玉を上条へと飛ばす。だがそれは、上条が右手を軽く振っただけで掻き消えてしまう。

「あー、ごめんごめん言っただけで掻き消えてしまったか。俺に能力は通用しねえんだ。このクソ忌々しい右手のせいだな」  
イマジナリーカード

一応、種明かしをしてあげながら右手をぶらぶらさせ、上条は男に歩み寄る。恐怖で動けない男のから空きの腹に一発パンチをぶち込んで膝を折らせる。

「ん」

ガクガク体を震わせ始めた男の目の高さまでしゃがみこんで上条は右手を差し出す。脂汗にまみれた顔で眉を潜める男に舌打ちし、

「金、出せよ」

その言葉が地獄から響くような低いトーンに聞こえたロン毛は震える手で財布ごと差し出す。

「おーし。いい子だ」

財布を引ったくり、ついでに立ち上がる時に相手の顔を蹴り飛ばした上条の顔は清々しいまでの笑顔だった。

「一応言っとくけどもう二度と俺に関わんなよ。次、お前らの顔見掛けたら今度こそぶつ殺すから」

泡吹いて倒れているロン毛に笑顔でそう忠告し、上条はファミレスに戻るうとする。恐らく料理は既にテーブルの上に置かれているだろう。

「あ、その前にコイツらの財布も回収しとくか」

倒れている三人に目を向ける。その矢先。

数億ボルトに達する電撃の槍が上条に飛んできた。慣れた手つきで幻想殺しを使用して電撃を吹き散らした後、上条は電撃を放った犯人の方向を向く。

灰色のプリーツスカートにサマーセーターの常盤台中学の服を着た、整っているが活発そうな顔立ちをした女の子。

上条はこの人物を知っている。

「またお前か、ビリビリ中学生」

七月十九日（後書き）

もしも上条さんが異常に喧嘩強くておまけに鬼畜だったら面白いかな、と思って書いてみました。

上条さんがこんな性格なので必然的に原作がブレイクされると思います。



七月十九日～二十日

上条は呆れたようにそう呟いた。

ビリビリ中学生 御坂美琴が突然、電撃を放ってきてそれを軽く往なすというのは、もはや上条と美琴が出会った時の習慣になっ  
てしまっていた。

思えばいつからコイツは俺に絡んでくるようになったかなー、と上条は身体中から紫電を放って臨戦態勢の美琴を見ながらのんびり  
と思いつ出し始める。

「……んー」

THE・回想中

「うへへ、君かわういーね」

「……………」

そついや数人の不良にコイツが絡まれてて。

(うわあ。巻き込まれる前にさっさと通り過ぎよう)

「おい、なに見てるんだコラー!!」

「はあ」

「なっ!?! コイツ後ろ向いたまま俺の蹴りを受け止め…………どわっ  
!」

気付いたら巻き込まれてて。巻き込まれた以上、正当防衛をする  
のが癖になってしまつてて。

「不幸だー」

「びぶるちっ!?!」

んで、不良グループの内の一人に顔面パンチ入れてブツ飛ばした  
ら。

「てめえ……」

「死ぬ覚悟は出来てるんだろうなああ!？」

「大体、お前ら恥ずかしくないの?」

「ああ?」

「お前らが声かけてた女見てみるよ。どう見てもガキじゃん主に胸  
とか胸とか胸とか。」

「こんな貧相な体した女に欲情するとかお前らロリコン? 上条さ  
んはドン引きですよ」

「この野郎なめやがって!」

「やつちまえ!」

「おおおお!」

「はい、俺と喧嘩するなら覚悟しとけよ不幸が」

んで、数十秒で全員再起不能にして。

そして感謝とかされるの面倒臭いから颯爽と立ち去ろうとしたら。

「私が一番ムカついたのはテメエだゴルアアアアアアアッ!」

THE・回想終了

「あーそうだったな」

「何が『そうだったな』よ!! アンタのせいで幻想御手の聞き込  
み失敗しちゃったじゃない。どうしてくれんのよ」

「はあ」

「何故自分がこんなに責め立てられなければならないのか、と上条  
は真剣に思った。」

というか、こっちは実際殴られるとかしてるのにファーストコンタクトが殺人級の電撃って何なの？ ヤバいですよ女の子相手に闇条さんが覚醒しそうですよ。

「前から思ってたけどお前っておかしくね？」

「……………？ は、はあ！？」

「お前と初めて会った時ってさあ。俺はお前を結果として助けたよなあ」

「な、何をいつてんのアンタ。別に頼んでないし、あんな奴等自分でな、何とかできてたし」

「俺が言いたいのはそんなんじゃないんだよコラ」

上条が一步踏み出すと美琴はさっきまでの態度と一変して肩をビクリと震わせた。

構わずに上条は美琴へとどんどん歩を進める。

「普通だったら『ありがとう』とか言うだろ。それ言うどころかお前は俺に会う度に電撃をいつもいつも放ちやがって。

さっきもそうだよ。俺は不運にもさっきの馬鹿達に絡まれただけだろうが。しかも殴られたっていうのに『大丈夫？』の一言じゃなくて電撃……………マジで何なの？」

気付けば美琴はゴクリと唾を飲んでいた。

いつもの上条だったら電撃を弾いた後は軽口を叩いて去っていくだけだったのに。今は明確な怒りを顔に浮かばせてこちらに迫ってくる。

無意識の内に後退りをしていた美琴だったが、いつの間にか壁に背が付いてしまっていた。

（ヤバい……………怒ったコイツ滅茶苦茶ヤバい！ と、とりあえず謝らないと）

「え、あ……………えと、その、し、ごめん」

目尻に涙まで浮かべて謝罪をしようとした美琴だったが、時既に遅し。スイッチの入った上条はもう本人以外に止められない。上条の中身は現在どす黒い感情に支配されてしまっていた。

「今更謝るんです、か!!」

壁際まで美琴を追い詰めた上条は拳を彼女の顔面の数センチずれた場所に思い切り叩き込む。煉瓦作りの壁の一部が豪快に吹き飛ぶ。「大体お前中学生だよな? 高校生の俺にタメ聞いてんじゃねえよ」

ずいっとお互いの息が吹きかかる距離まで上条は顔を近付ける。本来なら赤面必須な状況だが、今の美琴の顔は青ざめ、脂汗まで滲んでいた。

(何、コイツの目……瞳は私を捉えてるけど私を見ていないみたい。嫌だ……怖い、怖い怖い怖い……ッ!)

「そんなにビビるなら最初から俺に絡むなよな。次もし、今みたいな態度取ったらどうなるか分かってるな? 俺は心優しいから特別にワンチャンくれてやんよ」

そう言っただけで踵を返した直後、後ろでドサリという物音が響いた。首だけ後ろに回して見てみると、美琴がペタンと地面に座り込んでいるのが確認出来た。

「ただだけ精神ダメージ食らってんだよ、と上条は鼻で笑い、再びファミレスの入り口へと赴く。」

(……俺を疫病神扱いして避けるどころか毎回毎回絡んでくる珍しい奴だったか……これでいい。)

「というかウザったい絡みだったしそれに俺の近くにいると自嘲笑味な笑いを浮かべたまま、ついつい上条は心の声の一部を口に出してしまう。」

「不幸になっちまうからな……ん？」

何やら向こうから複数の足音が響いてくるのが聞こえてきた。そして上条は足音の正体が何かを直ぐに察知した。

「警備員か……！？ 飯なんか食ってる余裕は無いなクソツタレ」  
「さっきぶちのめした不良達の一人が『警備員さん』とかほざきながら逃げていたが本当に通報されるとは。」

上条は闇の中を駆け抜けてその場を後にした。

「マジで不幸だ……」

七月十九日～二十日（後書き）

読者様、お許しください！（久々すぎる更新的な意味で）

次回の更新は作者が美琴さんに愉快なオブジェにされるのを回避で  
きたらします

七月二十日

「うるせえ……ッ！」

携帯電話のコール音によって上条当麻は目を覚ました。

三分間程そのままにしていたがコール音は鳴り止まない。たまたまなくなった上条は携帯をひっ掴み電話先の相手を確認せず大声で怒鳴り付けた。

「朝っぱらからやつかましいわ！！ 電話する時間くらい考えやがれこのクソツタレが！！」

「上条ちゃん？」

「……げ、その幼女みたいな声は……」

「馬鹿だから今日補習です」

「不幸だ」

そういえば今日補習だったのを忘れていた。

上条は偽善を止め、良心も捨てようとしているが、人生まで捨てるようとは思っていない。学校にはなるべく毎日通うし、補習もきちんと受ける。

人生を自分が日頃不幸な目に会ってるからって振ってしまつのは、不幸に屈しているみたいで気に入らないという節が上条にはある。余程の事が無い限りこのスタンスは変わらないだろう。

「さて……まずは朝飯を食うか」

冷蔵庫の中を漁り焼きそばパンを取り出す。中には他の食材も眠っているが、上条は焼きそばパンだけで我慢する事にした。

冷蔵庫を閉めてその場で焼きそばパンのラップを外してモグモグ

しながら上条は次の行動に移る。

「今日は天気も良いし、布団でも干しとくか」

布団を丸めて抱えあげ、足先を使って窓と網戸を開けてベランダに出る。

「外は明るいのに俺のお先は真っ暗……なんつってな。ん？」

上条は目の前の光景に思わず目をパチクリさせた。だってそこには  
布団を干すはずの場所に何故か干されている女の子が！

「Oh……」

思わず外国人みたいなため息を吐いてしまった上条は女の子を観察する。

銀髪の髪の毛、そして金糸の刺繍が織り込まれている白い修道服というコスプレにしか見えない格好。それがベランダの手すりの上で両手両足をぶらーんと真下に下げている。

「……………よし」

上条は約五秒考えた後、スルーする事に決めた。

これは何かの事故でこうなったに違いない。目を閉じてるが、死んでるわけでもないし、目を覚ましたらいずれどこかに行くだろう。空いているスペースに布団を干し、何事も無かったように部屋の中に戻る。

「おなかへ」

何か聞こえたような気がしたが上条は振り返らなかつた。勢いよく窓と網戸を閉める。

「さて、制服に着替えるか」

「おなかへった、って言ってるんだよ？」

ビクリ、と体が硬直する。恐る恐る後ろを振り向くとそこには例



のコスプレ(?) シスターが。

いつの間にか鍵の掛かってないベランダの窓から侵入してきたらしい。珍しく上条が凡ミスを犯したのだった。

「てんめえ！ 何人様の家に不法侵入してるんですか！！」

「おなかへった」

「……俺の言葉通じてる？」

「おなかへったんだよ！」

「……………お前は俺を怒らせた」

「な、何をするの！？」

頭の中で何かがプチリと切れた上条は少女シスターの襟首を右手で掴んだ。そして猫のように軽々と少女を持ち上げるとズンズンと玄関へと歩き始めた。

だが七歩くらい歩いたところで突然、凄まじく重さが減った。

「あれ？」

見ると自分の手にあるのはあの少女が着ていた修道服。更に後ろを見ると。

「おいおいマジですか」

ハラリと下に落ちる修道服のフード部分。

……そして全裸になっている銀髪の少女がいた。

「何故脱いだ」

その言葉に少女はスイッチが入ってしまったらしい。顔を真っ赤にして犬歯を剥き出しにして上条に飛び掛かる。

「あらよつと」

しかしその噛み付き攻撃を上条は少し横に飛んで回避する。

悲運な事に飛び掛かった勢いを殺す方法が無い少女は床に思い切り腹打ちをしてしまった。

「テメエみたいなお子ちゃまが俺に喧嘩売るなんざ百万年早い。とつと服着て出ていくんだな」

ばさり、と床に伏せている少女に修道服を投げ付ける。

「うううううう……ごはんを食べさせずに全裸にした上に追い出すなんて鬼畜すぎるんだよ」

「はっ、不法侵入した身分で良く言うぜ。それにその修道服もう一回着れば全裸じゃなくなるだろうが」

「確かにそうだね。分かった、出ていく」

「よしよし、素直な子は上条さん嫌いじゃないですよ」

いそいそと修道服を羽織始める少女へ上条は作り笑いを浮かべる。

「だけど外の人に君が私を全裸にした上に床に叩き付けたって言うてやるんだよ!!」

「待てコラアアアアアツ!?!」

玄関へと思いつきりダッシュしようとした少女の腕を上条は思い切り掴む。

警備員に問い詰められても弁解出来る余地はあるかもしれない。

しかし、とてつもなく不幸めんどくさいな事になるのは確かである。

ならば、どうやってこの事態をどうやって收拾させるか。口封じが一番有効な手だと思うがその為には殺すわけにはいかない、というか殺すなどもはや良心以前の問題だ。

上条は頭をフル回転させる。

結局食べ物を与えるという事で收拾は付いた。

少女が握り寿司を食べている間に制服に着替えた上条はテーブル

越しに少女と対面する。

飯食わせて直ぐにおいだしても何だか一悶着ありそんな予感だったので上条はとりあえず会話をしてみる事にした。銀髪少女の正体も何だかんだで少し気になるし。

「ところでお前の名前って何なんだ？」

「そういえば自己紹介がまだだったね。私の名前はインデックス、  
って言うんだよ？」

「目次かよ妙な名前だな。俺は上条当麻<sup>かみじょうま</sup>。別名『疫病神』です」  
「疫病神？」

「はい、大勢の人達から嫌われています」

「……？ そんな風には見えないんだよ？」

小首を傾げるインデックスを見て上条はかなり虚しい気分になる。  
今関わったばかりの奴にそんな事言われてもな、と。

「俺ともう少し関わってみたら分かるさ……んで、何でお前は俺の  
ベランダにいたわけ？」

「屋上から屋上を飛んでる最中に背中を撃たれちゃってね。飛んで  
る時に落っこちちゃったんだよ」

「なるほどねえ。というか何で追われてたの？ 食い逃げ？」

意外とハードな生活を送っているのか？ と段々本格的にインデ  
ックスに興味が湧いてきた上条は気付けば会話にのめり込んでしま  
っていた。

「さすがにそれは失礼すぎるかも。追われてたんだよ」

「何に？」

「魔術結社だよ」

インデックスは儚げな感じで微笑みながらオカルトなワードを当  
たり前みたいに繰り返した。それを聞いた科学の住人の上条は。

「ふーん。魔術ねえ」

あつさりとそれを受け止めた。

他の住民だったら「コイツ頭おかしいだろ」くらいの台詞を吐きそうだが、上条は違った。

超能力なんて力があるんだから魔術なんてオカルトが実在しててもおかしくないんじゃない？ くらいの認識だが上条は魔術という存在を否定しなかった。

「それで魔術結社に追われる理由は？」

「私は名前の通り禁書目録インデックスだから。私の頭の中にある一冊の魔道書。それが連中の狙いなんだよきつと」

「相当頭に詰め込んでるなーその記憶力を俺に分けてほしいぜ全くん？ つー事は、お前は完全オカルトな人ってわけか」

「うん。……うん？」

「という事はお前の修道服も魔術が使われてたりするのか」

さつきまで刺繍で繋がっていたが今は安全ピンで布と布を繋ぎ合わせている修道服を見ながら上条は質問する。

「そうだよ。あれは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだよ

……でも何故か壊れたんだよ防御力は法王級なのに」

「あーそりゃ俺の幻想殺しのせいだな」

「へ？」

上条は右手をインデックスに向かって突き出す。まじまじとそれを見つめるインデックスだったが小首を傾げる。

「コイツは異能の力なら何でもぶち殺します。俺が日頃不幸なものこのクソツタレな右手のせいだそうです」

「し、信じたくないけど。実際『歩く教会』は壊れたし、信じるしかないんだよ……」

苦笑いをした後、インデックスはスクツと立ち上がった。

「そろそろ出ていかなきゃね。絶対防御が壊されて逃げるリスクが高くなっちゃったけど」

「言っておくが、俺は歩く教会とやらを壊した責任を取る気ねえぞ」

「別にいいよ。ってというか私に親切にしてくれた人を巻き込みたくないし」

「おっ。中々いい考えしてんなお前。災厄を持つてる奴はなるべく人と関わるのを避けるに限る」

ニヤリと上条は口端を吊り上げる。

「何だか知らないけど誉められたんだよ。あ！ おすしおいしかつたんだよ、ありがとう。……じゃあねっ！」

インデックスは上条に屈託の無い笑顔を向けた後、玄関へと走って向かっていく。

「待てよ」

その背中に上条は声を掛ける。

インデックスが振り向くと彼女の頭に修道服のフードが投げ付けられた。

「忘れ物だ。それ右手で触ってないからヘルメット代わりにはなると思うぜ」

「ありがとうなんだよ」

そして今度こそインデックスは玄関を開けて外に出ていった。

「しかしまあ」

自分一人になった空間で上条はポツリと呟く。

「何年ぶりだろうな。両親以外にあんな嘘偽りの無い笑顔を向けたのは」

七月二十日（後書き）

この小説の上条さんはパワーアップします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6945u/>

---

とある災厄の幻想殺し《イマジンプレイカー》

2011年10月30日03時10分発行